

伊藤東一、国際的視野をもって登場した園芸家

会長 椎野 昌宏

日本の園芸界は江戸時代に開花し、菊、花菖蒲、朝顔、サクラソウや、観葉植物のカンノンチク、チョウセイラン、キンシナンテンなどが一般の武士や町民の間で栽培され、世界的にみても園芸センターの一つとなっていました。幕末の動乱を経て開港後の横浜にやってきた外国人を中心に、新たに洋種のもものが続々と導入され、日本の庭園は更に賑やかになりました。然し洋種のもものはどちらかと言えば、金持ち階級や一部趣味家による限られた対象でした。大正から昭和前期にかけて先駆けた園芸家たちがおり、導入した洋種の研究、栽培、育種を熱心に行ないかなりの実績を挙げましたが、戦争による中断もあり、洋種園芸が一挙に開花し、普及するのは戦後になってからです。このような流れのなかで、将来を見越して国際的視野をもって園芸界を先導し、後進にもっとも大きな影響を与えた一人が伊藤東一さんです。

園芸への芽生え

先ず彼自身の書いた少年時代の思い出から書きましょう。(図解 球根植物の栽培1952年加島書店刊のはしがきより引用)

‘確か明治40年の秋だと思つて居る。今は無い品川の妙華園、小田原の辻村農園、滝野川の大日本農園等の先人から、虎の子の小遣をはたいて、ヒアシンス、チューリップ、クロッカス等の球根を買つて叱られたのは、指折り数えれば、もう50年近い前である。球根が届いた時は、あまりの嬉しさに抽斗(ひきだし)に入れたり出したり、あっちに植え、こちらに植え替え、とうとうその年は花をしおらせその上、叱られたことを覚えて居る。植物が色々な姿をして美しい花をつけるのが、子供心にも不思議で又いとおしく、それから今なお続いて各国から変わった球根を取り寄せ、変わった作り方を覚えるのに苦心して居る。’

人間は一個の精神のなかに子供と大人を同時に持っていると言われます。子供の部分で美しいものに憧れ、芸術に接し、科学、技術を創り出す、そしてそのような少年、少女期に持った童心を純化しておけば大人になってもその感受性は衰えないのです。伊藤さんにとっては花好きの童心が生涯続きやがて園芸界に光芒を放つ存在となりました。

園芸活動の始まり

昭和元年(1926)の時点では長野県木曾町の木曾山林学校の先生をしていました。(現長野県木曾山林高等学校1901年創立)。間もなく学校を辞めて、上京し蒲田にあった東京農産商會に勤め、花卉類の導入、増殖、販売を行いました。昭和2年(1927)には台湾から高砂ユリ(*Lilium formosanum*)の種子を入手し、増殖栽培し、大量に切り花として販売し、話題となりました。種子を蒔いてから10ヶ月位で開花するという効果的な性質に着眼したのです。また夕霧草(*Trachelium*)の種子を欧州から仕入れ、容易に栽培できる優雅な花として子苗に仕立てて売りました。いずれも僅かの金額で種子を輸入し、小苗や切り花に加工して販売し利益をあげるといふ狙いでした。一方その頃から育種にも広範囲に手をつけ始めました。

多摩川に東光ナーセリー丸子農場を創設

その後、独立して東京の田園調布より多摩川の下流に下った地域に農場を設け、本格的に園芸経営に乗り出しました。温室も数棟備え、スイセンやグラジオラスの栽培や育種をしました。またチオノドクサ、プーシキニア、エレムラス、アリストロメリア・エレガンスなどの珍しい球根植物の栽培も行いました。積極的に海外から種子や苗を仕入れて殖やし販売し普及させました。いずれにせよ戦前から戦後にかけて多摩川の丸子農場は多くの園芸家たちのメッカとして賑わったようです。戦後まもなくは食糧難の時代で野菜類を作っていたようですが、その後の苦難を乗り切り、菊、花菖蒲などの伝統園芸花に加え、ダリア、スイセンなどの洋種園芸花に重点をおいて栽培を拡大していったようです。品種改良にも力を注ぎ、優れた品種を続々発表しました。

園芸植物育種の成果

その1. 黄花シャクヤクを生む

シャクヤクの*Lactiflora*(花香殿)と黄花ボタンの*Alice Harding*(金晃)を種間交雑して黄花のシャクヤクを世界で初めて作出しました。オリエンタル・ゴールドと呼ばれ、ボタンとシャクヤクの長所を兼ね備えて花持ち、花立ち良く、鮮やか

な黄色の受け咲きで、整った草姿を持ち、丈夫で作りやすく世界的に評価されました。現在でも日本では「ボタシヤク」、米国では「Itoh Hybrid」と呼ばれて盛んに栽培され流通しています。

その2. 球根系など優れた品種を発表

キクの白眉、ダリアの東光冠、グラジオラスのピエロ、スイセンの瑞祥などの名花を次々と作出して発表しました。グラジオラスのピエロ(Pierrot)はアメリカのGove's Glad Book1958のカタログに白に紫のブロッチが入る目立つ花としてリストアップされ、欧米でも人気があったことが分かります。花菖蒲の改良については特に功績あり別項で詳しく書きます。彼は常々「戦後日本の園芸界は世界各国に比較して10数年以上立ち遅れている」と嘆き、寝食を忘れて品種改良に専念したようです。

花菖蒲界への貢献

その1. 数々の銘花の作出

白地に鮮やかな藤紫糸覆輪の肥後系六英花の名花「殊勝」を初めとして、現在の花菖蒲栽培家や花菖蒲園でも盛んに作られ観賞されている伊藤交配種がたくさんあります。夕富士、一天四海、相生、乙女の夢、夏姿、潮来などです。花菖蒲の新花育成は苗が何千本あっても1本1本が全部違った花を開き、咲くまでは予想もできない。実生株の蕾が色づき、いよいよ明朝この夜で初めての花が開くという時の期待と焦燥に満ちた気持ちは自ら実生をやってみた人でないと分からないかもしれないと花菖蒲の第一人者の平尾さんはかねがね言っています。平尾さんは花時に何度か東光ナーセリー丸子農場に行きましたが、その都度伊藤さんは下駄を突っかけてさあ行きましようかとぬかみの中を先に立って案内された。「こうして1日に7回も8回も畑に行ってみるのですよ」と笑っていたと当時を描写しています。戦後いち早く江戸系を中心に実生を始められた伊藤さんに、平尾さんが江戸系をあまり褒めずに「熊本系の苗を分けて下さい」とお願いしたらまだあまり増えていないからと断られ、ご機嫌をそこねてしまったようだとも語っています。丸子農場の花菖蒲以外の華やかな洋種系植物群も目の当たりにして、平尾さんのグローバルな園芸世界観が生まれるひとつの刺激となったかもしれません。

その2. 花菖蒲の京王百花園の建設

昭和29年(1954)に日本花菖蒲協会と京王電

鉄との間で、戦前の遊園地京王閣の跡地に花菖蒲園を建設する計画が締結されました。東京都調布市の京王多摩川駅前約4000坪の土地で、伊藤さんが計画を推進し、自分の手持ちの花菖蒲株数万本を無償にて提供しました。早速植付けを開始し、昭和30年の6月の時点では95%の植付けが完了しました。然しながら残念なことに伊藤さんは4月下旬病に倒れ、翌31年春の開園を待たず、30年7月17日(1955)に急逝しました。推測ですが享年は56才位の、まだこれからという人生でした。京王花菖蒲園は弟子の押田成夫氏が引き継ぎ開園しました。

伊藤東一さんの描いた夢

伊藤さんの能力について弟子の押田氏は「乱れ咲く実生菊の選別また各種実生新種の命名及びその特長に関する細部の観察は実に鋭く、小さく咲いた菊1輪を見て、翌年の3、4本仕立てや1本仕立てへの試作結果まで見抜かんとするその勘と眼力は実に天才的だった」と言っています。花菖蒲についても予知的センスを持ち、品種改良には毎年特定の目標を定めてそれに対する母本の遺伝的性質を徹底的に明らかにしていました。

伊藤さんが洋種植物系統にウエイトをおき、その海外からの導入、栽培、普及につとめるかたはら、日本の伝統園芸花の花菖蒲の改良にも並々ならぬ意を注いでいたことにも敬服します。また日本の園芸界全般の在りかたにも関心を持ち、各地にバラバラに存在していた菊花会を一本にまとめあげて日本菊花協会とし、昭和24年(1949)に米国シアトルで開かれた平和記念万国菊花大会に参加し、ブルーリボン賞を獲得することに貢献しました。

外国のものをどんどん取り入れようという貪欲さ、それを日本的に改良しようとする試み、まさに明治人の特性を発揮した園芸人です。残した大きな業績からして、彼の1年は余人の10年あるいは数10年にも相当したのかも知れません。

伊藤さんが作出した花菖蒲

殊勝 濡燕 夕富士 太平洋 一天四海 相生
東鹿の子 夕霞 乙女の夢 夕霧 ちとせ
有馬川 霧ヶ島 夏姿 青葉川 明石瀉 妹背川
綾瀬川 初紫 潮来 須磨の花 利根川 富士川
桜吹雪 最上川 吉野 乙女の衣 恩恵 磯隠
磯紫 和風 芙蓉峯 雲井鶴 東唄 東光の遊び
東鏡 東光の夢 東鶴